# 『陔餘叢考』訓譯卷八之上

中林史朗

今回は、學會誌への投稿論文が多數に上った爲、卷八（從一至九）の約半分に該當する五篇（從一至五）を登載させて頂く事とした。

毎回の事ではあるが、原稿整理擔當の諸士の努力には、誠に頭の下がる思いを禁じ得ない。實際毎週讀み合わせをして互いに訓讀や解釋の檢討を行っているのは、既に十一卷に入っている。その爲、現實の雜誌登載卷數とは略三卷ほどのタイムラグが生じている。結果、毎週の讀書會參加時には大學生や大學院生であった諸士が、實際の原稿整理段階では、既に大學の非常勤講師となったり、或いは全く異なる他分野に就職したりして、それぞれが日々多忙な生活を送っている。にも關わらず、擔當の諸士は毎回寸暇を惜しんで原稿を整理して、責務を果たされている。

讀書會の時だけ、最もらしく「ああだこうだ」と御託を竝べ、期日が來れば、「原稿を出してくれ」とさも當たり前の様に要求する、水先案内人たる小生の態度に比して、擔當の諸士の何と眞摯なることか。穴が有ったら入りたいとはこの事で、改めて諸士の努力に深謝の意を表する次第である。

この卷八の上を擔當された諸士は、河井義樹（元・大學院博士後期課程生）・桑瀨明子（本學非常勤講師）・齋藤昭敏（元・大學院博士前期課程生）・關淸孝（本學非常勤講師）・田中良明（大學院博士後期課程生）の五人（五十音順）である。

平成十九年季秋

識於黃虎洞

**【原文】**

1　南北史原委

南北史原委見於李延壽自序其父大師少有著述之志以宋齊梁陳魏齊周隋南北分隔南謂北爲索虜北謂南爲島夷其史皆詳於

本國而略於他國欲彷吳越春秋體編年紀之客於侍中楊恭仁家有宋齊梁魏四代史因漸次編輯未畢而歿延壽欲繼先志適在顔師古孔穎達下佐修各史因得齊梁陳等五代舊事目所未覩者合之家中舊本參訂編次尚多所闕貞觀十五年令狐德棻奏延壽同修晉書因復得入內府勘究宋齊魏三代之事十七年褚遂良又奏延壽佐修隋書十志因益得披尋校勘時史局中梁陳周齊隋五代史已就以十志未成故未頒行延壽不敢使人抄錄乃手自繕寫又於此正史外參考雜史一千餘卷然後成書前後凡十六年既訖事呈令狐德棻閱畢始表上之時已在高宗之世此南北史始末也按延壽修史時沈約宋書蕭子顯齊書魏收魏澹兩家魏書皆已流布梁陳周齊隋五史雖未頒行而延壽同在纂修之列故得抄錄以爲底本而參考雜史以成之刪去蕪詞專敘實事大概較原書事多而文省洵稱良史然其中增刪亦有不同者今以各原書核對延壽於宋齊魏三史刪汰最多以此三史本蕪雜太甚也於梁陳周齊隋五史則增刪俱不甚多以此五史本唐初名人所修延壽亦在纂輯之列已屬善本故也

**【書き下し】**

南北史原委

南北史の原委は、李延壽の自序に見ゆ。「其の父大師は少くして著述の志有り。宋・齊・梁・陳・魏・齊・周・隋の南北分隔するを以て、南は北を謂ふに索虜と爲し、北は南を謂ふに島夷と爲す。其の史は皆本國に詳らかにして、他國に略なり。吳越春秋の體に彷ひて、編年して之を紀さんと欲す。侍中楊恭仁の家に客たりしとき、宋・齊・梁・魏の四代史有り。因りて漸次編輯するも未だ畢らずして歿す。延壽 先志を繼がんと欲す。適〻顔師古・孔穎達の下に在りて、各史を佐修す。因りて齊・梁・陳等の五代の舊事を得、目の未だ覩ざる所の者は、之を家中の舊本と合し參訂編次するも、尚ほ闕く所多し。貞觀十五年、令狐德棻 延壽を奏して同に晉書を修めしむ。因りて復び內府に入りて、宋・齊・魏三代の事を勘究するを得。十七年、褚遂良 又延壽を奏して隋書の十志を佐修せしむ。因りて益〻披尋校勘するを得。時に史局中、梁・陳・周・齊・隋の五代史已に就るも、十志未だ成らざるを以ての故に未だ頒行せず。延壽 敢へて人をして抄錄せしめず。乃ち手ずから自ら繕寫す。又此に於て正史の外は、雜史一千餘卷を參考し、然る後書を成す。前後凡て十六年。既に事を訖へて呈す。令狐德棻 閱し畢り、始めて表して之を上る。時は已に高宗の世に在り」と。此れ南北史の始末なり。按ずるに延壽の

修史の時は、沈約の宋書、蕭子顯の齊書、魏收・魏澹兩家の魏書 皆已に流布するも、梁・陳・周・齊・隋の五史は未だ頒行せずと雖も而れども延壽は同に纂修の列に在り。故に抄錄を以て底本と爲して雜史を參考し、以て之を成す。蕪詞を刪去し、專ら實事を敘し、大概原書と較ぶれば、事多くして文省なし。洵に良史と稱せらる。然れども其の中の增刪は亦た同じからざる者有り。今各〻の原書を以て核對すれば、延壽 宋・齊・魏の三史に於ては刪汰最も多し。此の三史 本と蕪雜太だ甚だしきを以てなり。梁・陳・周・齊・隋の五史に於ては、則ち增刪は俱に甚だしくは多からず。此の五史は本と唐初名人の修むる所にして延壽亦た纂輯の列に在り、已に善本に屬するを以ての故なり。

【語注】

○其の父大師……『北史』卷一百序傳に「大師少有著述之志、常以宋、齊、梁、陳、魏、齊、周、隋南北分隔、南書謂北爲索虜、北書指南爲島夷。又各以其本國周悉、書別國並不能備、亦往往失實。常欲改正、將擬吳越春秋、編年以備南北。至是無事、而恭仁家富於書籍、得恣意披覽。宋、齊、梁、魏四代有書、自餘竟無所得。居二年、恭仁入爲吏部尚書、大師復還會州。武德九年、會赦、歸至京師。尚書右僕射封德彝、中書令房玄齡並與大師親通、勸留不去、曰、時屬惟新、人思自效、方事屏退、恐失行藏之道。大師曰、昔唐堯在上、下有箕山之節、雖以不才、請慕其義。於是俶裝東歸。家本多書、因編緝前所修書。貞觀二年五月、終於鄭州滎陽縣野舍、時年五十九。既所撰未畢、以爲沒齒之恨焉。所製文筆詩賦、播遷及遭火、多致失落、存者十卷。子慶孫、正禮、利王、延壽、安世。延壽與敬播俱在中書侍郎顏師古、給事中孔穎達下刪削。既家有舊本、思欲追終先志、其齊、梁、陳五代舊事所未見、因於編緝之暇、晝夜抄錄之。至五年、以內憂去職。服闋、從官蜀中、以所得者編次之。然尚多所闕、未得及終。十五年、任東宮典膳丞日、右庶子、彭陽公令狐德棻又啓延壽修晉書、因茲復得勘究宋、齊、魏三代之事所未得者。十七年、尚書右僕射褚遂良時以諫議大夫奉敕修隋書十志、復準敕召延壽撰錄、因此遍得披尋。時五代史既未出、延壽不敢使人抄錄、家素貧罄、又不辦雇人書寫。至於魏、齊、周、隋、宋、齊、梁、陳正史、並手自寫、本紀依司馬遷體、以次連綴之。又從此八代正史外、更勘雜史於正史所無者一千餘卷、皆以編入。其煩冗者、卽削去之。始末修撰、凡十六載。始宋、凡八代、爲北史、南史

二書、合一百八十卷。其南史先寫訖、以呈監國史、國子祭酒令狐德棻、始末蒙讀了、乖失者亦爲改正、許令聞奏。次以北史諮知、亦爲詳正。因遍諮宰相、乃上表」と有る。

**【現代語譯】**

『南史』・『北史』成立の顛末は、李延壽の自序から知ることができる。（『北史』の序傳に）「父の大師は若い時から著作にたずさわりたいという志があった。宋・齊・梁・陳・魏・齊・周・隋をそれぞれ南北に分けているので、南朝の史書では北朝の國を記述する際には索虜と記し、北の史書では南朝を記述する際には島夷と記した。（また）それぞれの史書は、本國に對しては詳らかであるのに、他國になると簡素になる。（そこで、）『吳越春秋』の體例に倣い、年代を追って南北兩朝の歷史を著述しようを考えていた。侍中楊恭仁の家に身を寄せていた時のこと、彼の家には宋・齊・梁・魏の四代の史書を藏していた。そこで次第に史書を編纂していったが、完成する前に父は死んでしまった。李延壽は、父の志を繼ぎ、史書を完成させたいと考えていた。ちょうどその時顏師古と孔穎達のもとで、南北各朝の歷史書を編纂する仕を補佐したので、齊・梁・陳など五つの王朝の事跡を知る機會に惠まれた。（また、五代に關して）まだ見ていない事跡については、家に藏していた舊本を參考し比較檢討し編纂したが、なおいまだ缺落部分が多かった。貞觀十五年に令狐德棻が奏上して李延壽を『晉書』編纂に當てた。そこで復び內府に入り、宋・齊・魏三王朝の事跡を調査する機會に惠まれた。十七年に褚遂良がまた奏上して、李延壽に『隋書』十志の編纂作業を補佐させた。そのためますます史書を調査檢討する機會に惠まれた。この時、歷史を編纂する史局では、すでに梁・陳・周・齊・隋の五代の史書が完成していたが、十志が完成していなかったために廣まらなかった。李延壽は他人に史書を書寫する作業をやらせず、自分の手で書き資料を集めた。また正史の外では雜史一千餘卷を參考にした。そうした後に書を完成させた。完成までに全て十六年を要した。事業を終えると令狐德棻に進呈したが、閱讀を終えるとはじめて上表してこの書を獻上した。時代は高宗の治世になっていた」とある。これが『南史』『北史』完成までの顛末である。さらに考えてみると、李延壽が編纂していた時には、沈約の『宋書』・蕭子顯の『齊書』、魏收と魏澹の『魏書』が流布していたが、梁・陳・周・齊・隋の五史は未だ行き渡って

はいなかった。しかし、李延壽は歴史書編纂作業に加わっていたため、原本の史書を書寫して定本とすることができ、さらに雑史を參考し、これを完成させることができたのであろう。（また）無駄な言葉は削り、事實を書き記すことに專念した。おおかたは原書通りであり、事跡を多く記し、飾り立てないので、良史と呼ばれたのである。そうであっても『南史』『北史』において原書から增やしたり削ったりしたのは、同一ではないのである。そこで今、それぞれの原書と詳らかに比較すると、李延壽は、宋・齊・魏の三史において削った部分が最も多い。それはこの三史がもともと無駄に飾った文がとても多いからである。梁・陳・周・齊・隋の五史では、いづれでも增やしたり削ったりした箇所はそれほど多くはない。それはこの五史はもともと唐初の名人が編纂したものであり、また、李延壽もその編纂作業に加わっており、當時から善本とされていたためである。

（關　清孝）

【原文】

2　南史繁簡失當處

南史於宋事惟劉穆之謝晦檀道濟諸大傳多有删改實爲繁簡得宜其餘大都仍宋書原文而少節之如王懿張劭張敷張暢劉敬宣朱齡石毛修之傅宏之胡藩劉康祖等傳可核對也其增於宋書者類多新奇可喜易動觀聽如孝武紀增其爲皇子守彭城時魏太武大舉至城下長史張暢出與魏李孝伯語帝改服隨暢出孝伯目帝不輟出謂人曰張侯側有人風骨非常士也又孝武末年好爲長夜之飲每旦盥漱又命酒俄頃數斗憑几昏睡或有奏事則肅然整容無復酒色內外皆服其神明廢帝紀增其爲太子時常被孝武斥責卽位後欲掘孝武陵并詈孝武爲鼷奴劉穆之傳增其貧時向妻舅乞檳榔被侮劉述傳增其視從子俁疾命取酒肉謂禮有疾飲酒食肉等事劉瑀傳增其與何偃並馳落後有牛駛馭精等語諸如此類不一而足雖足使閱者動色解頤兼可資談柄然南史之佳處在於删繁存要而不在此瑣言碎事也其删節舊史處亦有失之太簡者王鎭惡傳武帝討司馬休之鎭惡爲先鋒聞帝將至乃先攻斬休之將朱襄一段功績全不書檀道濟先從武帝討盧循徐道覆積戰功甚多南史一切不載直從武帝不豫道濟受顧命敘起又劉道規追桓元於崢嶸洲兵不滿萬而桓元兵數萬奄至諸將懼欲退道規力持不可乃大戰破之又攻桓仙客偃月壘等功甚著宋書一一敘之而其下云江陵之平也道規推劉毅爲元功何無忌爲次功己爲末功此正見其有功不伐南史於戰功一概删去但存元功次功末功

數語則竟似道規之功本少矣劉眞道傳宋書敘其與裴方明等討破楊難當及其子虎戰功甚著孟龍符傳宋書敘其廣固之戰以單騎衝賊先奪據水源功爲第一南史皆不書宋書文穆王皇后傳載其弟藻尚臨川公主被妬離婚因歷敘宋世公主妬惡并載江敷辭婚一疏南史盡刪之以其與王皇后無涉也然宋書南史俱不立帝女傳則此等宮闈惡習於何見之宋書於王皇后傳牽連書之未嘗無意南史不載轉無以垂戒此又過求簡淨之失也

**【書き下し】**

南史の繁簡失當の處

南史は、宋の事に於て惟だ劉穆之・謝晦・檀道濟の諸大傳のみ多く刪改有り。實に繁簡宜しきを得たりと爲す。其の餘は大都宋書の原文に仍りて少しく之を節す。王懿・張劭・張敷・張暢・劉敬宣・朱齡石・毛修之・傅宏之・胡藩・劉康祖等の傳の如きは核對す可きなり。其の宋書より增す者は類ね多く新奇にして喜ぶ可く、觀聽を動かし易し。孝武紀に「其*の皇子と爲りて彭城を守るの時、魏太武は大擧して城下に至り、長史張暢の出で、魏の李孝伯と語るに、帝は服を改め暢に隨ひ出づ。孝伯は帝を目すも輟めず、出でて人に謂ひて曰く『張侯の側らに人有り。風骨 常士に非ざるなり』と。又孝武末年に好みて長夜の飲を爲し、毎旦盥漱し、又酒を命じ俄頃にして數斗、几に凴れ昏睡す。或ひと事を奏すること有れば則ち肅然として容を整へ復た酒色無く、內外皆其の神明に服す」を增し、廢帝紀に「其*の太子爲る時、常に孝武の斥責を被り、卽位の後、孝武の陵を掘らんと欲し、并せて孝武を詈り『韃奴』と爲す」を增し、劉穆之傳に「其*の貧なる時、妻舅に向ひ檳榔を乞ひ、侮らる」を增し、劉述傳に「其*の從子俁の疾を視、命じて酒肉を取らしめて謂ふ『禮、疾みては酒を飲み肉を食ふこと有り』と」等の事を增し、劉瑀傳に、其の何偃と並び馳せ、落後して「牛*は駛く馭は精なり」等の語有るを增すが如き、諸〻の此の如きの類は一にして足らず。閲者をして色を動かし頤を解き、兼ねて談柄に資す可からしむるに足ると雖も、然れども、南史の佳き處は繁を刪り要を存するに在りて此の瑣言碎事に在らざるなり。其の舊史を刪節するの處も亦た之を太だ簡に失せる者有り。王鎭惡傳、武帝の司馬休之を討つに、鎭惡は先鋒と爲る。帝の將に至らんとするを聞き、乃ち先に攻めて休之の將朱襄を斬るの一段の功績は全く書かず。檀道濟*の先に武帝に從ひ盧循・徐道覆を討ち、戰功を積むこと甚だ多きも、南史は一切載せず。直だ武帝の不

豫に從ひ、道濟の顧命を受くより敘起するのみ。又劉*道規桓元を崢嶸洲に追ふも兵は萬に滿たずして桓元の兵數萬奄ち至り、諸將は懼れ退かんと欲し、道規は力めて不可を持し、乃ち大戰して之を破る。又桓仙客の偃月壘を攻むる等の功は甚だ著し。宋書は一一之を敘し、而も其の下に「*江陵の平ぐや、道規は劉毅を推し元功と爲し、何無忌を次功と爲し、己を末功と爲す」と云ふ。此れ正に其の功有るも伐らざるを見すなり。南史は戰功に於て一概に刪去して但だ「*元功・次功・末功」の數語を存すのみなれば則ち竟に道規の功は本少なきに似たり。劉*眞道傳は、宋書は其の裴方明等と楊難當及び其の子虎を討ち破り、戰功甚だ著しきを敘す。孟*龍符傳は、宋書は其の廣固の戰ひに單騎を以て賊を衝き、先に奪い水源に據る。功は第一爲りと敘す。南史は皆書かず。宋書文*穆王皇后傳は、其の弟藻の臨川公主に尚し、妬を被り離婚するを載せ、因りて宋世の公主の妬惡を歷敘し、并せて江敷の婚を辭するの一疏を載す。南史は盡く之を刪りて以て其の王皇后と涉る無きなり。然れども宋書・南史俱に帝女傳を立てざれば則ち此れ等の宮闈の惡習は何に於て之を見ん。宋書は、王皇后傳に於て牽連して之を書くは未だ嘗て意無くんばあらず。南史の載せざるは轉た以て垂戒すること無し。此れ又簡淨を過求するの失なり。

**【語注】**

○其の皇子と……『南史』卷二宋本紀中孝武帝に「十二年、立爲武陵王、二十二年、累遷雍州刺史。自晉江左以來、襄陽未有皇子重鎭、時文帝欲經略關・河、故有此授。及魏太武大舉至淮南、時帝鎭彭城、魏使尚書李孝伯至、帝遣長史張暢與語、而帝改服觀之。孝伯目帝不輟、及出、謂人曰張侯側有人風骨視瞻、非常士也」と有り、「帝末年爲長夜之飲、每旦寢興、盥嗽畢、仍復命飲、俄頃數斗、憑几惛睡、若大醉者。或外有奏事、便肅然整容、無復酒色。外內服其神明、莫敢弛惰」と有る。○其の太子爲……『南史』卷二宋本紀中前廢帝に「九月癸巳、幸湖熟、奏鼓吹。戊戌、還宮。帝自以爲昔在東宮、不爲孝武所愛、及卽位、將掘景寧陵、太史言於帝不利而止。乃縱糞於陵、肆罵孝武帝爲鼈奴、又遣發殷貴嬪墓、忿其爲孝武所寵」と有る。○其の貧なる……『南史』卷十五劉穆之傳に「穆之少時、家貧誕節、嗜酒食、不修拘檢。好往妻兄家乞食、多見辱、不以爲耻。其妻江嗣女、甚明識、每禁不令往江氏。後有慶會、屬令勿來。

穆之猶往、食畢求檳榔。江氏兄弟戲之曰檳榔消食、君乃常飢、何忽須此。妻復截髮市肴饌、爲其兄弟以餉穆之、自此不對穆之梳沐。及穆之爲丹陽尹、將召妻兄弟、妻泣而稽顙以致謝。穆之曰本不匿怨、無所致憂。及至醉飽、穆之乃令厨人以金枅貯檳榔一斛以進之」と有る。○其の從子俁……『南史』卷十三劉述傳に「韞弟述字彥思、亦甚庸劣。從子俁疾危篤、父彥節母蕭對之泣、述嘗候之、便命左右取酒肉令俁進之、皆莫知其意。或問焉、答曰禮云、有疾飲酒食肉」と有る。○牛は駛く馭……『南史』卷十五劉瑀傳に「轉右衞將軍。年位本在何偃前、孝武初、偃爲吏部尚書、瑀圖侍中不得。與偃同從郊祀、時偃乘車在前、瑀策駟居後、相去數十步、瑀蹋馬及之、謂偃曰君轡何疾。偃曰牛駿馭精、所以疾耳。偃曰君馬何遲。曰騏驥羅於羈絆、所以居後。偃曰何不着鞭使致千里。答曰一蹙自造青雲、何至與駑馬爭路。然甚不得意、謂所親曰人仕宦、不出當入、不入當出、安能長居戶限上。因求益州。及行、甚不得意、至江陵、與顏竣書曰朱脩之三世叛兵、一日居荊州、青油幕下、作謝宣明面目見向、使齋帥以長刀引吾下席、於吾何有、政恐匈奴輕漢耳。坐奪人妻爲妾免官」と有る。○王鎭惡傳……『宋書』卷四十五王鎭惡傳に「初行、告刺史司馬休之、求遣軍以爲聲援、休之遣其將朱襄領衆助鎭惡。會高祖西討休之、鎭惡乃告諸將曰百姓皆知官軍已上、朱襄等復是一賊、表裏受敵、吾事敗矣。乃率軍夜下、江水迅急、倏忽行數百里、直據都尉治。既至、乃以竹籠盛石、堙塞水道、襄軍下、夾岸擊之、斬襄首、殺千餘人」と有る。○檀道濟の……『宋書』卷四十三檀道濟傳に「高祖創義、道濟從入京城、參高祖建武軍事、轉征西。討平魯山、禽桓振、除輔國參軍・南陽太守。以建義勳、封吳興縣五等侯。盧循寇逆、羣盜互起、郭寄生等聚作唐、以道濟爲揚武將軍・天門太守討平之。又從劉道規討桓謙・荀林等、率厲文武、身先士卒、所向摧破。及徐道覆來逼、道規親出拒戰、道濟戰功居多」と有る。○劉道規 桓……『宋書』卷五十一劉道規傳に「因往彼攻之、卽禽此舫。因鼓譟倡曰已斬何澹之。賊徒及義軍竝以爲然。因縱兵、賊衆奔敗、卽克盆口、進平尋陽。因復馳進、遇玄於崢嶸洲。道規等兵不滿萬人、而玄戰士數萬、衆竝憚之、欲退還尋陽。道規曰不可。彼衆我寡、强弱異勢。今若畏懦不進、必爲所乘、雖至尋陽、豈能自固。玄雖竊名雄豪、內實恇怯、加已經奔敗、衆無固心。決機兩陳、將雄者克。昔光武昆陽之戰、曹操官渡之師、皆以少制多、共所聞也。今雖才謝古人、豈可先爲之弱。因麾衆而進、毅等從之、大破玄

軍。郭銓與玄單舸走、江陵不復能守、欲入蜀、爲馮遷所斬。義軍遇風不進、桓謙・桓振復據江陵、毅留巴陵、道規與無忌俱進攻桓謐於馬頭、桓蔚於竈洲、皆破之。無忌欲乘勝直造江陵、道規曰兵法屈申有時、不可苟進。諸桓世居西楚、羣小皆爲竭力、振勇冠三軍、難與爭勝。且可頓兵養鋭、徐以計策縻之、不憂不克也。無忌不從、果爲振所敗。乃退還尋陽、繕治舟甲、復進軍夏口。僞鎭軍將軍馮該戍夏口東岸、揚武將軍孟山圖據魯山城、輔國將軍桓仙客守偃月壘。於是毅攻魯山城、道規無忌攻偃月、竝克之、生禽仙客山圖」と有る。○江陵の平ぐ……『宋書』巻五十一劉道規傳に「江陵之平也、道規推毅爲元功、無忌爲次功、自居其末。進號輔國將軍・督淮北諸軍事、并州刺史、義昌太守如故」と有る。○元功・次功……『南史』巻十三劉道規傳に「江陵之平、道規推毅爲元功、無忌爲次、自居其末」と有る。○劉眞道傳は……『宋書』巻四十七劉眞道傳に「十四年、出爲梁・南秦二州刺史。十八年、氐賊楊難當侵寇漢中、眞道率軍討破之。而難當寇盜猶不已、太祖遣龍驤將軍裴方明率禁兵五千、受眞道節度。十九年、方明至武興、率太子積弩將軍劉康祖・後軍參軍梁坦・陳彌・裴肅之・安西參軍段叔文・魯尚期・始興王國常侍劉僧秀・綏遠將軍馬洗・振武將軍王奐之等、進次潭谷、去蘭皐數里。難當遣其建節將軍苻弘祖・啖元等固守蘭皐、鎭北將軍苻德義於外爲游軍、難當子撫軍大將軍和重兵繼其後。方明進擊、大破之於濁水、斬弘祖并三千餘級。遣康祖追之、過蘭皐二千餘里。和又遣德義助戰、康祖又大破之、和退保脩城。難當遣建忠將軍楊林・振威將軍姚憲領二千騎就和、方明又率諸將攻之、和敗走、追至赤亭、難當席卷奔叛。方明遣康祖直趣百頃、僞丞相楊萬壽等一時歸降。難當第三息虎先戍陰平、難當既走、虎逃竄民間、生禽之、送京都、斬于建康市」と有る。○孟龍符傳は……『宋書』巻四十七孟龍符傳に「高祖伐廣固、以龍符爲車騎參軍、加龍驤將軍・廣川太守、統步騎爲前鋒。軍達臨朐、與賊爭水、龍符單騎衝突、應手破散、既據水源、賊遂退走。龍符乘勝奔逐、後騎不及、賊數千騎圍繞攻之、龍符奮矟接戰、每一合輒殺數人、衆寡不敵、遂見害、時年三十三。高祖深加痛悼、追贈青州刺史。又表曰故龍驤將軍・廣川太守孟龍符、忠勇果毅、隕身王事、宜蒙甄表、以顯貞節、聖恩嘉悼、寵贈方州。龍符投袂義初、前驅效命、推鋒三捷、每爲衆先。及西剿桓歆、北殄索虜、朝議爵賞、未及施行。會今北伐、復統前旅、臨朐之戰、氣冠三軍。于時逆徒實繁、控弦掩澤、龍符匹馬電躍、所向摧靡、奮戈深入、知死弗吝。

賊超奔遁、依險鳥聚、大軍因勢、方軌長驅。考其庸績、豫參濟不、竊謂宜班爵土、以襃勳烈。乃追封臨沅縣男、食邑五百戸」と有る。○文穆王皇后傳…――『宋書』巻四十一孝武文穆王皇后傳に「長子藻、位至東陽太守。尚太祖第六女臨川長公主諱英媛。公主性妒、而藻別愛左右人吳崇祖、前廢帝景和中、主讒之於廢帝、藻坐下獄死、主與王氏離婚。泰始初、以主適豫章太守庾沖遠、未及成禮而沖遠卒。宋世諸主、莫不嚴妒、太宗每疾之。湖熟令袁愔妻以妒忌賜死、使近臣虞通之撰妒婦記。左光祿大夫江湛孫斅當尚世祖女、上乃使人爲斅作表讓婚」と有る。

**【現代語譯】**

『南史』は、宋の敍述についてただ劉穆之・謝晦・檀道濟の諸大傳だけ多く刪り改めている。本當に書くべき所は詳しく書き、省略すべき所は省略しているものである。其の他は大抵『宋書』の原文に仍っているが、少しだけ省いている箇所もある。王懿・張劭・張敷・張暢・劉敬宣・朱齡石・毛修之・傅宏之・胡藩・劉康祖等の傳などは比較してみるとよい。『南史』が『宋書』より增している箇所は、大抵多くが物珍しく面白い話で、讀者を感動させやすいものである。孝武紀で、「孝武が皇子として彭城を守った時、魏の太武が大擧して城下に至り、長史の張暢が出て、魏の李孝伯と對面するに當り、帝は變裝して暢に付き隨った。孝伯は帝を睨み付けたが退かなかったので、歸り際に人に語って『張侯の側らに人がいたが、その品格はただ者ではなかった』と言った」という話や、「孝武は末年に好んで夜通し宴會を行い、每朝手や口を濯ぐと、又酒を持ってこさせ、またたくまに數斗を飲み干し、机にもたれて昏睡した。（しかし）ある人が事を奏上した場合は姿を整え、酒を飲んでいる樣子を現さなく、內外の人達は皆その神明さに心服した」という話を增し、廢帝紀で、「彼が太子であった時に、常に孝武に斥けられ、卽位した後に孝武の陵墓を掘ろうとしたり、孝武を詈って『赤鼻』と言った」という話を增し、劉穆之傳で、「彼が貧困であった時に、義父の家に行って檳榔を求めて侮られた」という話を增し、劉述傳で、「彼の從子の俁が病氣となったのを視て、酒肉を取ってこさせ、『禮では、病氣になった場合は酒を飲んで肉を食らうことが有る』と言った」などという話を增し、劉瑀傳で、劉瑀が何偃と竝んではしり、負けて「牛は駛く御者は優れている」などと言ったという話を增すようもので、

諸々のこのような話題の類は一つ二つなどというものではなく、讀者が顔色を變えて大笑し、更に雑談のネタに使うことができるとしても、『南史』の良い所は煩雑な箇所を刪り、必要な箇所を殘した所にあるのであって、このような些細で下らない所にあるのではない。（しかし）『宋書』を刪り省いた箇所でも、刪り過ぎて失敗した所も有る。王鎮惡傳では、武帝が司馬休之を討つに當り、鎮惡は先鋒となり、帝がもうすぐ到着するのを聞き、そこで先に攻めて休之の將の朱襄を斬ったときの功績は全く書いていない。檀道濟が先に武帝に付き從って慮循・徐道覆を討ち破り、戰功を積むことが非常に多かったことは、『南史』には一切載せておらず、ただ武帝の臨終に付き添い、道濟が遺命を受けた事から書き始めている。又劉道規は、桓元を崢嶸洲まで追いつめたが、兵士は萬に滿たず、一方で桓元の兵士數萬が奄ち至り、諸將は懼れて退却しようとしたが、道規はその不可なることを說き、大戰して之を破り、又桓仙客の偃月壘を攻擊したときなどの功績は非常に目立っている。『宋書』では一一これらの事を敍述しており、其の最後には「江陵が平定し、道規は劉毅を推薦して元功とし、何無忌を次功とし、自分を末功とした」と書いている。此れは正しく功績があっても誇らなかった事を示している。『南史』では、戰功については全て刪去しており、但だ元功・次功・末功の數語を書き記しているだけであるから、結局道規の功績は本から少なかったかのようである。劉眞道傳は、『宋書』では彼が裴方明等と楊難當と其の子虎を討ち破り、戰功が非常に目立っていたことを敍述している。孟龍符傳は、『宋書』では彼が廣固の戰で、單騎で賊軍を衝き、先に水源を奪い押さえ、功は第一とした、という話を書いている。（しかし）『南史』では全く敍述していない。『宋書』文穆王皇后傳では、その弟の藻が臨川公主を貰い受けたが、（藻が浮氣したため）嫉妬されて離婚したことを載せ、こうして宋代の公主の妬惡を敍述し、更に江斅が結婚を辭退した一疏を載せている。『南史』では盡くこの事を刪っており、それらのことが王皇后と關連していない。しかしながら『宋書』『南史』は倶に帝女傳を立ててないのだから、此れ等の宮中の惡習はそれなりの意圖がなかった譯ではない。『宋書』が王皇后傳で强引に書き連ねているのは、今までこのような考えがなかったわけでもない。『南史』がこれについて記載しないのは、なおさら後世に戒めを殘す事が無くなってしまう。これというのも簡明さ

を餘計に求めたことによる缺點である。

（齋藤　昭敏）

【原文】

3　南史多用齊書原文

南史於蕭齊時事亦僅於諸大傳增減竄易以見其考核之博敘述之工其餘則多仍齊書舊文非篇篇俱有改訂也如齊書本紀謂蕭氏出漢蕭何之後蕭望之乃其先祖之次因歷敘自何以下直至齊高帝世次南史則謂望之傳不載齊典所書恐乖實錄顏師古註解漢書已正其非故削而不錄只從高帝之高祖淮陰令敘起此其紀實也他如欝林王何妃傳增蕭坦之請殺妃所私楊珉之一事褚淵傳增其父湛之牛墮井躬自輓之淵讀書不輟父歿後有兩厨寶物在其生母郭氏處嫡母求之郭欲不與淵力勸乃與之山陰公主悅淵美請於帝召入主夜就之淵堅拒不亂明帝臨崩托顧命於淵有欲使着黃羅襹之語四貴輔政時有齊高讓增戶邑一書淵與袁粲同答一書以及在袁粲室嘯咏等事王儉傳增其說齊高受禪及代向褚淵關說齊國建後酌定朝儀及百僚致敬世子之禮齊受禪後酌定郊祭殷祭之禮皇太子妃薨酌定宮臣之服等事劉善明傳增其少厲清節及母陷于魏乃頗貪或問之知以將贖母故母歸清節益峻等事皆頗有關繫其他仍多用齊書無甚改易觀垣榮祖焦度張岱褚炫何戢張褚張融周顯王晏蕭諶蕭坦之江敷徐孝嗣蕭紞張欣泰等傳可核對也即較原書稍有增加者不過瑣言碎事如高帝紀增其少時符瑞皇后傳增高后陳氏先與裴氏議婚后夢有迎車至如常人禮后不肯去繼有龍旂豹尾迎者乃喜從之後裴果不成婚而嫁於帝及炒胡麻未燃火而薪自燒等事欝林王紀增高帝嘗拔白鬚因王在旁呼帝爲太翁乃止不拔豫章王嶷死後見形于沈文季曹虎素知梁武非常人曾借錢十七萬虎已卒梁武即位忘之忽夢虎來責乃送錢還其子仍擢用之謝超宗傳劉道隆聞武帝稱超宗殊有鳳毛乃出問超宗身有異毛如此之類大都新奇可喜其實無關于朝政之大也

【書き下し】

南史は多く齊書の原文を用ふ

南史は蕭齊の時の事に於て、亦た僅かに諸大傳に於て增減竄易し、以て其の考核の博く、敘述の工なるを見すも、其の餘は則ち多くは齊書の舊文に仍り、篇篇 俱に改訂有るに非ざるなり。齊書本紀に「蕭氏は漢の蕭何の後に出で、蕭望之は乃ち其の先祖の次なり」と謂ひ、因て何自り以下を歷敘し、直ちに齊の高帝の世次に至る。南史は則ち「望之の傳は載せず。齊典に書する所は、恐るらくは實錄に乖る。顏師古 漢書を註解し、已に其の非を正す。故に削り

て錄さず」と謂ひ、只だ高帝の高祖淮陰令從り敘起するが如きは、此れ其の實を紀すなり。他の欝林王何妃傳に、蕭坦之 妃の私する所の楊珉之を殺さんことを請ふの一事を增し、褚淵傳に其の父湛之の牛 井に墮ち、躬自ら之を輓く。淵 書を讀みて輟めず、父の歿後、兩厨の寶物、其の生母郭氏の處に在る有り。嫡母之を求むるも、郭與へざらんと欲す。淵 力めて勸めて乃ち之を與ふ。山陰公主 淵の美を悅び、帝に請ひて召し入らしむ。主 夜ごとに之に就くも、淵堅く拒みて亂れず。明帝 崩ぜんとするに臨み、顧命を淵に托し、黄羅襬を着け使めんと欲するの語有り。四貴 政を輔くるの時、齊の高 戶邑を增すを讓るの一書、淵 袁粲と同に答ふるの一書有り。以て袁粲の室に在りて嘯咏するに及ぶ等の事を增す。王儉傳に其の齊高に受禪を說き、及び代りて褚淵に向ひて關說し、齊國建つるの後、朝儀及び百僚の敬を世子に致すの禮を酌定し、齊の受禪の後、郊祭殷祭の禮を酌定し、皇太子妃薨らんとするに、宮臣の服するを酌定す等の事を增し、劉善明傳に、其の少きとき淸節に厲む、母の魏に陷るに及び乃ち頗る貪す。或ひと之を問ひ、以て將に母を贖はんとするの故なるを知る。母は歸り、淸節益々峻なる等の事を增すが如きは、皆頗る關繫有り。其の他仍ほ多く齊書を用ふるも甚しくは改易すること無きは、垣榮祖・焦度・張岱・褚炫・何戢・張褚・張融・周顯・王晏・蕭諶・蕭坦之・江敷・徐孝嗣・蕭紡・張欣泰等の傳を觀て、核對すべきなり。卽ち原書に較べて稍增加有る者は瑣言碎事に過ぎず。高帝紀に、其の少き時の符瑞を增し、皇后傳に、高后陳氏先に裴氏と婚を議す。后 迎車至る有り、常人の禮の如く、后 去るを肯ぜず。繼で龍旂豹尾の迎ふる者有り。乃ち喜びて之に從ふを夢む。後 裴果して婚を成さずして帝に嫁ぐ。及び胡麻を炒るに、未だ火を燃やさずして薪自ら燒ゆ等の事を增し、欝林王紀に、高帝嘗て白鬚を拔かんとするに、王 旁に在るに因り、帝を呼びて太翁と爲す。乃ち止めて拔かずを增し、豫章王嶷の死す。後 形を沈文季に見す。曹虎は素より梁武の常人に非ざるを知る。曾て錢十七萬を借す。虎已に卒し、梁武卽位し之を忘る。忽ち夢に虎の來りて責む。乃ち錢を送り其の子に還し、仍りて之を擢用す。謝超宗傳に、劉道隆武帝の超宗に殊に鳳毛有ると稱するを聞き、乃ち出でて超宗の身に異毛有るかを問ふが如き、此の如きの類は、大都新奇 喜ぶ可きも、其の實は朝政の大に關はる無きなり。

【語注】

○蕭氏は漢の……『南齊書』卷一本紀第一高帝上に「太祖高皇帝諱道成、字紹伯、姓蕭氏。小諱鬬將、漢相國蕭何二十四世孫也。何子酇定侯延生侍中彪、彪生公府掾章、章生皓、皓生仰、仰生御史大夫望之、望之生光祿大夫育」と有る。○望之の傳は……『南史』卷四齊本紀上第四に「據齊梁紀錄、並云出自蕭何。又編御史大夫望之以爲先祖之次。案何及望之於漢爲勳德、而望之本傳不有此陳、齊典所書、便乖實錄。近祕書監顏師古博考經籍、注解漢書、已正其非。今隨而改削云」と有る。○欝林王何妃傳……『南史』卷十一列傳第一后妃上に「又有女巫子楊珉之、亦有美貌。妃尤愛悅之、與同寢處、如伉儷。及太孫卽帝位、爲皇后、封后嫡母劉爲高昌縣都鄉君、所生母宋爲餘杭廣昌鄉君。后將拜、鏡在牀無因墮地。其冬與太后同日謁太廟。楊珉之爲帝所幸、常居中侍。明帝爲輔與王晏徐孝嗣王廣之並面請、不聽。又令蕭諶坦之固請、皇后與帝同席坐、流涕覆面、謂坦之曰、楊郎好年少、無罪過、何可枉殺。坦之耳語於帝曰、此事別有一意。不可令人聞。帝謂皇后爲阿奴、曰阿奴暫去。坦之乃曰、外間並云楊珉之與皇后有異情、彰聞遐邇。帝不得已、乃爲敕。」と有る。○褚淵傳に……『南史』卷二十八列傳第十八に「湛之有一牛、至所愛、無故墮聽事前井、湛之率左右躬自營救之、郡中喧擾、彥回下簾不視也。又有門生盜其衣、彥回遇見、謂曰、可密藏之、勿使人見。此門生慚而去、不敢復還、後貴乃歸罪、待之如初」と有る。○王儉傳に……『南史』卷二十二列傳第十二に「及高帝爲太尉、引儉爲右長史、尋轉左、專見任用。大典將行、禮儀詔策、皆出於儉。褚彥回唯爲禪詔、又使儉參懷定之」と有る。○劉善明傳に……『南史』卷四十九列傳第三十九に「五年、魏剋青州、善明母在焉、移置代郡。善明布衣蔬食、哀戚如持喪、明帝每見爲之歎息。轉巴西梓潼二郡太守。善明以母在魏、不願西行、泣涕固請、見許。朝廷多哀善明心事、元徽初遣北使、朝議令善明舉人。善明舉州鄉北平田惠紹使魏、贖母還」と有る。○高帝紀に……『南史』卷四齊本紀上第四に「高帝以宋元嘉四年丁卯歲生、姿表英異、龍顏鍾聲、長七尺五寸、鱗文徧體。舊宅在武進縣、宅南有一桑樹、擢本三丈、橫生四枝、狀似華蓋」と有る。○皇后傳に……『南史』卷十一列傳第一后妃上に「年十七、裴方明爲子求婚、酬許已定。后夢見先有迎車至、猶如常家迎法、后不肯去。次有迎至、龍旂豹尾、有異於常、后喜而從之。既而與裴氏不成婚、竟嬪于上。嚴整有軌度造次必依禮法。生太子

及豫章王嶷。太子初在孕、后嘗歸寧、遇家奉祠。爾日陰晦失曉、舉家狼狽共營祭食。后助炒胡麻、始復內薪、未及索火、火便自然」と有る。○欝林王紀に……『南史』巻五齊本紀下第五に「高帝方令左右拔白髮、問之曰、兒言我誰耶。答曰、太翁。高帝笑謂左右曰、豈有爲人作曾祖而拔白髮者乎。卽擲鏡鑷。其後問訊、高帝指示賓客曰、我基於此四世矣。及武帝卽位、封爲南郡王、時年十歲」と有る。○豫章王嶷……『南史』巻四十六列傳第三十六に「時帝在戎多乏、就武換借、未嘗不得、遂至十七萬。及帝卽位、忘其惠。天監二年、帝忽夢如田塍下行、兩邊水深無底、夢中甚懼。忽見武來負、武帝得過曰、卿今爲天下主、乃爾忘我顧託之言邪。我兒飢寒無依、昔所換十七萬、可還其市宅。帝覺、卽使主書送錢還之、使用市宅」と有る。○謝超宗傳に……『南史』巻十九列傳第九に「王母殷淑儀卒、超宗作誄奏之、帝大嗟賞、謂謝莊曰、超宗殊有鳳毛、靈運復出。時右衞將軍劉道隆在御坐、出候超宗曰、聞君有異物、可見乎。超宗曰、懸磬之室、復有異物邪。道隆武人無識、正觸其父名曰、旦侍宴、至尊說君有鳳毛。超宗徒跣還內。道隆謂檢覓鳳毛、至闇待不得乃去」と有る。

**【現代語譯】**

『南史』は南齊の時代の史實に關して、また僅かに諸傳において書き加えたり減らしたり書き換えたりしていて、その考證の博さ、その敘述の巧みさを示してはいるが、その他は、多くは『南齊書』の舊文に依據していて、篇ごとに倶に改訂があるという譯ではない。『南齊書』の本紀に「蕭氏は漢の蕭何の後に出ており、蕭望之は蕭道成の先祖の流れに位置している」とあって、蕭何より以下を數えあげて敘述し、その後に齊の高帝の世代に至っている。『南史』はつまり「蕭望之の傳は載せていない。『南齊書』に記している所は、おそらくは實錄に悖るものである。顏師古は『漢書』に註を施すに、已にその非を正している。だから削って記錄していない」と言い、ただ高帝が皇高祖である淮陰令整のことから筆を書き起こしているというようなものは、これはその事實を記しているのである。その他の欝林王何妃傳に、蕭坦之が妃の私する所である楊珉之を殺すことを請い願った一事を增やし、褚淵傳にその父湛之の牛が井戸に落ち、湛之自らがその牛を引き上げ（助け）た。褚淵は書物を讀むのを止めることがなく、父の歿後、兩厨にある寶物は、生母である郭氏の處にあった。嫡母は

寶物を求めたが、郭氏は與へないようにした。褚淵は努めて嫡母に寶物を勸め與えた。山陰公主は褚淵の美貌を悅んだ。公主は帝に願い出て宮中に褚淵を招き入れ、山陰公主は夜になると褚淵に近づいていったが、褚淵は堅く拒否して亂れることはなかった。明帝がまさに崩御しようする際、遺言を褚淵に托し、黃羅襬を着けさせようとした時の言葉がある。四貴が政治を補佐していた時、齊の高帝が戶邑を增加することを讓った一書、褚淵が袁粲と共に答えた一書が有る。袁粲が室內で歌を歌うに及んだ等の事を增やした。王儉傳に齊の高帝に受禪を說き、及び（王儉が高帝に）代わって褚淵を說き伏せ、齊國建立の後、朝儀と百僚が世子に敬意を拂う禮を取り決め、齊の受禪の後、郊祭・殷祭の禮を取り決め、皇太子妃が今まさに薨ろうとした際、宮臣達が喪に服すことを取り決めた等の事を增やし、劉善明傳に、劉善明は年少のころから淸廉で節操を守るのに努めた。（しかし）母親が北魏の手に渡るに及ぶと非常に欲深くなった。ある人がその理由を善明に尋ねると、母親を償おうとする爲であることを知った。母親は歸還し、善明はより一層淸廉で嚴しくなった等の事を增やしたのは、これらはみな非常に關連がある。なおその他多くは『南齊書』を用いてはいるが、甚しくは改訂してはいないということは、垣榮祖・焦度・張岱・褚炫・何戢・張褚・張融・周顯・王晏・蕭諶・蕭坦之・江敷・徐孝嗣・蕭緬・張欣泰等の傳を觀て、比較檢討することができる。つまり原書に比較して、やや增加があるのは、些細な事柄にしか過ぎない。高帝紀に、彼の年少の頃の符瑞を增やし、皇后傳に、高后陳氏は先に裴氏と婚姻を結ぶ話し合いをした。皇后は、迎えの車が來た。常人に對する禮のように、皇后は行かなかった。その後に龍旂豹尾の車で、迎えの人がきた。そこで皇后は喜んで彼等に從った、という夢を見た。その後、結局裴氏とは婚姻を結ばずに高帝に嫁いだ。及び胡麻を炒るにあたり、火を焚かずに薪が自ら燒えた等の事を增やし、鬱林王紀に、高帝は嘗て白鬚を拔かせようとするに、王はその旁にいた臣下により、高帝を太翁と呼んだ。そこで帝は止めて拔かなかったことを增やし、豫章王巍が崩御なされた。後、その形を沈文季に示した。曹虎は素より梁武が常人ではないことを知っていた。曾て（武帝は曹虎に）錢十七萬を借りていた。曹虎は已に死亡し、梁の武帝は卽位しこのことを忘れていた。にわかに曹虎がやってきて金の返却を無心することを夢に見た。そこで金を曹虎の息子に返却し、息子

を抜擢して任用した。謝超宗傳に、劉道隆は武帝が超宗の體にことさら鳳毛があると稱しているのを聞き、そこで出でて超宗の身に異毛が有るかを尋ねたというようなもの、このような類のものは、おおむね新奇で喜ぶべきことではあるが、實際の所、朝政の大事とは關係がないのである。

（河井　義樹）

【原文】

4　南史敘事失當處

柳元景之拒魏師也薛安都瞋目橫矛單騎突陣四向奮擊左右皆辟易於是衆軍並鼓噪俱前魏縱突騎來安都怒甚乃脫兜鍪解所帶鎧惟著絳衲襠襠衫馬亦去具裝馳入賊陣猛氣咆勃所向無前當其鋒者無不應刃而倒此事宜敘在安都傳乃反詳於元景傳內而安都傳但云隨柳元景向關陜所向克捷宋蒼梧王既被弒齊高帝集朝貴議所立王敬則拔刀麾衆曰天下之事皆應關蕭公敢有開言者血染敬則刀袁粲欲有所言敬則又叱之乃止此事應敘於敬則傳乃反詳於本紀而敬則傳不載齊高帝因荀伯玉奏太子過失遂發怒有易儲意晝臥太陽殿王敬則直入叩頭請往東宮慰太子帝不答敬則大呼宣勅往東宮並索輿輿至帝了無動意敬則索衣衣帝仍牽上輿遂幸東宮與諸王宴飲盡歡太子得無恙此事亦應敘於敬則傳內乃反詳於伯玉傳而敬則傳不敘

【書き下し】

南史の敘事の失當の處

柳元景の魏師を拒むや、薛安都目を瞋らし矛を横たへ單騎陣を突き、四向奮擊すれば左右皆辟易す。是に於て衆軍並びに鼓噪し俱に前む。魏 突騎を縱ちて來る。安都怒ること甚しく、乃はち兜鍪を脫ぎ帶ぶる所の鎧を解き、惟だ絳衲襠衫のみを著け、馬も亦 具裝を去り、賊陣に馳せ入り猛氣咆勃すれば、向ふ所前無く、其の鋒に當る者 刃に應じて倒れざるは無し。此の事 宜しく敘して安都の傳に在るべきに、乃るに反って元景の傳內に詳かにして安都の傳は但だ、柳元景に隨ひ關・陜に向かひ、向かふ所克く捷つ、と云ふのみ。宋の蒼梧王 既に弒され、齊の高帝 朝貴き集め立つる所を議せしむに、王敬則 刀を拔き衆を麾ねき曰く、天下の事 皆應に蕭公に關はるべし。敢へて言を開く者有れば、血 敬則が刀を染めん、と。袁粲 言ふ所有らんと欲すも、敬則又之を叱せば乃はち止む。此の事應に敬則の傳に敘すべきに、乃るに反って本紀に詳かにし

て敬則の傳は載せず。*齊の高帝 荀伯玉の太子の過失を奏するに因り、遂に怒りを發し易儲の意有り。晝に太陽殿に臥すに、王敬則直ちに入り叩頭し、東宮に往き太子を慰めんことを請ふ。帝答へず。敬則宣勅と大呼し東宮に往かしめんとす。並びに輿を索む。輿 至るも帝 了に動く意無し。敬則 衣を索め帝に衣せ、仍つて牽きて輿に上らせ、遂に東宮に幸し諸王と宴飲し歡を盡さしめ、太子 恙無きを得。此の事も亦應に敬則の傳内に於て敘すべきに、乃るに反つて伯玉傳に於て詳かにして敬則の傳は敘せず。

**【語注】**

○柳元景の……『南史』巻三十八柳元景傳に「(元嘉二十七年)十一月、元景率衆至弘農、營於開方口。仍以元景爲弘農太守。初安都留住弘農而諸軍已進陝。元景既到、謂安都曰、卿無坐守空城、而令龐公孤軍深入、宜急進軍。衆軍竝造陝下、列營以逼之、竝大造攻具。魏城臨河爲固、恃險自守。季明・安都・方平・顯祖・趙難諸軍頻三攻未拔、安都・方平各列陣於城東南以待之。魏兵大合、輕騎挑戰、安都瞋目横矛、單騎突陣、四向奮擊、左右皆辟易、殺傷不可勝數、於是衆軍竝鼓譟俱前。魏多縱突騎、衆軍患之。安都怒甚、乃脱兜鍪解所帶鎧、唯著絳衲兩當衫、馬亦去具裝、馳入賊陣。猛氣咆勃、所向無前、當其鋒者無不應刃而倒。如是者數四。每入、衆無不披靡。」と有り、同巻四十薛安都傳に「(元嘉)二十七年、隨王誕板安都爲建武將軍、隨柳元景向關・陝、率步騎居前、所向剋捷。」と有る。柳元景は、字は孝仁。河東解の人。『宋書』巻七十七・『南史』巻三十八に傳有り。薛安都は、字は休達。河東汾陰の人。初め魏に仕えたが元嘉中に宋に歸し、後再び魏に歸す。『宋書』巻八十八『魏書』巻六十一・『南史』巻四・『北史』巻三十六に傳有り。○宋の蒼梧王……『南史』巻四齊高帝本紀に「(元徽)五年七月戊子、楊玉夫等與直閤將軍王敬則通謀弑蒼梧。齎首、使左右陳奉伯藏衣袖中、依常行法稱敕開承明門、出囊貯之、以與敬則。敬則馳至領軍府、叩門大呼自言報帝、門猶不開。敬則自門窒中以首見帝、帝猶不信。乃於牆上投進其首、帝索水洗視、敬則乃踰垣入。帝跣出、敬則叫曰、事平矣。帝乃戎服、乘常所騎赤馬、夜入殿中。殿中驚怖。及知蒼梧死、咸稱萬歲。至帝踐阼、號此馬爲龍驤赤。明旦召袁粲・褚彥回・劉彥節入會西鍾槐樹下計議。帝以事讓彥節、彥節未答、帝鬚髯盡張眼光如電。次讓袁粲又不受。敬則乃拔刀、在袴側躍麾衆曰、天下之事、皆

應關蕭公、敢有開一言者、血染敬則刀。仍呼虎賁劍戟羽儀、手自取白紗帽加帝首、令帝卽位曰、今日誰敢復動、事須及熱。帝正色呵之曰、卿都不自解。粲欲有言、敬則又叱之乃止。帝乃下議、備法駕、詣東城、迎立順帝。於是長刀遮粲・彥節等、失色而去。」と有る。蒼梧王は、南朝宋の明帝の子、諱は昱。在位四年。弑され、追廢されて蒼梧王となる。又は後廢帝と稱す。『宋書』卷九に傳有り。齊の高帝は、蕭道成。宋の順帝を廢し、自立して國號を齊とする。『南齊書』卷一・『南史』卷四に傳有り。王敬則、南沙の人。初め宋の員外郎になるが、蒼梧王の狂虐を忌み、齊の高帝に仕える。後、明帝の時に叛き、誅される。『南齊書』卷二十六・『南史』卷四十五に傳有り。袁粲、陽夏の人。宋の明帝の時、官は中書令。褚淵等と共に明帝の顧命を受ける。順帝の時中書監に遷り、石頭に鎭し齊の高帝を朝堂に攻めようと謀るが、謀泄れて殺される。『宋書』卷八十九に傳有り。○齊の高帝…――『南史』卷四十七荀伯玉傳に「時武帝在東宮、自以年長、與高帝同創大業、朝事大小悉皆專斷、多違制度。左右張景眞偏見任遇、又多僭侈。武帝拜陵還、景眞白服乘畫舴艋、坐胡祷。觀者咸疑是太子、內外祗畏、莫敢有言者。驍騎將軍陳胤叔先已陳景眞及太子前後得失、伯玉因武帝拜陵之後、密啟之、上大怒。豫章王嶷素有寵、政以武帝長嫡、又南郡王兄弟竝列、故武帝爲太子、至是有改易之意。武帝東還、遣文惠太子・聞喜公子良宣敕詰責、并示以景眞罪狀、使以太子令收景眞殺之。胤叔因白武帝、皆言伯玉以聞。武帝憂懼、稱疾月餘日。上怒不解、晝臥太陽殿、王敬則直入叩頭、啟請往東宮以慰太子。高帝無言、敬則因大聲宣旨往東宮、命裝束。又敕太官設饌、密遣人報武帝、令奉迎。因呼左右索輿、高帝了無動意。敬則索衣以衣高帝、仍牽上輿。遂幸東宮、召諸王宴飲、因游玄圃園。長沙王晃捉華蓋、臨川王映執雉尾扇、聞喜公子良持酒鎗、南郡王行酒、武帝與豫章王嶷及敬則自捧肴饌。高帝大飲、賜武帝以下酒、竝大醉盡歡、日暮乃去。是日微敬則、則東宮殆廢。」と有る。荀伯玉は、字は弄璋。高帝が淮陰に在った時、常に左右を衞り、卽位に及び封は南豐縣子、官は輔國將軍となる。高帝は崩に臨み、伯玉を指し以て武帝に屬すが、永明の初、武帝に誅される。『南齊書』卷三十一・『南史』卷四十七に傳有り。太子は、諱は賾。後の武帝。廟號は世祖。『南齊書』卷三・『南史』卷四に傳有り。

【現代語譯】

柳元景が魏の軍を拒み戰った時、薛安都は眦を決して矛を横たえ、ただ一騎で敵陣に突入し、縱横無盡に奮擊したので、周圍の者たちは皆驚き退いた。そこで、見方の軍の兵士たちも、皆で太鼓を鳴らして前進した。魏軍は騎兵を放ってきたが、安都は大變怒り、兜を脱いで帶びていた鎧も解き外し、ただ赤い打掛だけを着て、その馬も具裝を取り去り、賊陣に馳せ入り激しい氣性でたけり怒っていたので、その向かう所に敵無く、彼の鋒先に觸れる者は刃の動きに應じて倒れない者はいなかった。この事は安都の傳に敘述するべきであるが、しかしながら反って元景の傳内に詳しく敘述されていて、安都の傳にはただ柳元景に隨って關・陜に向かい、向かふ所敵にうち勝った、というだけである。宋の蒼梧王がすでに弑せられ、齊の高帝が朝廷の貴い身分の者を集めて、誰を天子に立てるかを議論させると、王敬則が刀を拔いて他の者たちに指圖して「天下の事はすべて蕭公に關ることである。敢えて異議を言う者がいるのならば、その血が我が刀を染めるだろう」と言い、袁粲は異議を言いたかったが、敬則が叱咤したので止めてしまった。この事は敬則の傳に敘述するべきであるのが、しかしながら反って本紀に詳しく敘述されていて、敬則の傳はこの事を載せていない。齊の高帝は、荀伯玉が太子の過失を奏したことから、怒りをあらわして嫡子をかえようとする意思を持っていた。ある日の晝に太陽殿に臥していた所、王敬則がそのまま入って來て叩頭し、東宮に往き太子を慰めることを請い願ったが、高帝が答えなかったので、敬則は大聲で敕命を呼ばわり、高帝を東宮に行かせようとして（帝の）輿を持ってこさせた。輿が來ても高帝は動こうとしなかったので、敬則は（帝の）衣を持って來させて高帝に着させ、その上で輿に引っぱり乘せて、そのまま東宮に行幸し諸王と宴飲して歡を盡させたので、太子は恙無きを得た。この事もまた敬則の傳内に敘述するべきであるのが、しかしながら反って伯玉の傳に詳細に敘述されていて、敬則の傳には敘述されていない。

（田中　良明）

【原文】

5　南史與齊梁陳三書互異處

南史於蕭齊事多用齊書原文縱有增删無甚岐異惟高帝紀吳喜

賚酒一事齊書謂宋明帝疑帝非人臣相使喜封銀壺酒賜之高帝出迎酌飲之喜還奏帝意乃悅南史則謂高帝懼鴆不肯飲喜告以誠先飲之帝乃酌飲喜還奏明帝乃悅齊書庾杲之傳武帝嘆其風韻之美王儉以爲蟬冕所映更生風采陛下當與以卽眞南史則以此語爲柳世隆之言齊書崔慧景傳謂慧景起兵向闕過廣陵崔恭祖開門納之慧景停二日渡江至京口時江夏王寶元鎭京口爲內應乃合二鎭兵奉寶元向京師南史則謂慧景與恭祖未有素約慧景至廣陵恭祖閉城不出慧景夜襲廣陵據之遣子覺赴京口寶元見其兵少恐不濟事反擊覺走之及恭祖與覺以八千人濟江柳惔等勸寶元與慧景合乃以覺爲先鋒恭祖次之慧景爲都督北史梁武帝破建業執蕭寶夤將殺之寶夤逃奔於魏歷顯仕屢與梁戰後以謀反誅是寶夤仕魏三十餘年而死也南齊書寶夤傳則謂齊和帝中興二年以謀反誅是寶夤當梁武未爲帝時已被刑矣蓋蕭子顯撰次南齊書在梁時有所忌諱也梁書元帝紀承聖二年魏遣郭元建治舟師於合肥南史則書齊遣郭元建按是時東魏已微政出高氏梁書從名分而言故書魏南史按實書故云齊也梁書鄧元起傳謂元起不出兵救晉壽以致陷沒蕭淵藻來代表其逗遛乃收付獄元起自縊死南史謂淵藻至求元起良馬元起不與淵藻殺之後梁武知其枉責淵藻曰元起爲汝報讎汝爲讎報讎據此則當以南史爲確其尤互異者梁書臨川王宏都督北討諸軍大潰而歸喪師辱國及通姦公主等事一字不書反大加褒美南史則一一直書略無諱飾蓋梁書多用國史記載粉飾原文而南史則參考實事也陳書後主沈皇后傳謂隋亡後后自廣陵過江還鄉里不知所終南史謂過江至毗陵天靜寺爲尼名觀音貞觀初卒陳書吳明徹傳謂明徹戰敗爲周師所執憂憤遘疾卒南史謂周封明徹爲懷德郡公位大將軍陳書蓋以完節予之也陳書徐陵傳謂陵卒謚曰章南史謂後主爲太子時以己作托爲他人者以示陵陵曰不成詞句後主銜之及卒後主已正位乃謚曰章僞侯姚察傳南史謂察父僧坦精於醫梁時爲大醫正兩宮所賜皆爲察兄弟游學之資陳書不載僧坦以醫術得幸但云知名梁代二宮禮遇優厚每得賜爲察游學之資蓋自諱其醫也

**【書き下し】**

5　南史　齊・梁・陳三書と互に異なる處

南史は、蕭齊の事に於ては、多く齊書の原文を用ひ、縱ひ增刪すること有るも、甚しくは岐異すること無し。惟だ高帝紀の吳喜　酒を賚ふの一事は、齊書には「宋の明帝　帝人臣の相に非ざるかと疑ひ、喜をして銀壺酒を封じて之を賜はしむ。高帝　出迎し、酌みて之を飲み、喜　還り奏す。帝　意乃ち悅ぶ」と謂ひ、南史には則ち「高帝　鴆を懼れ肯

て飲まず、喜は告ぐるに誠を以てし、先に之を飲む。帝は乃ち酌みて飲み、喜は還り奏す。明帝は乃ち悅ぶ」と謂ふ。齊書庾杲之傳に「武帝は其の風韻の美を嘆じ、王儉は以爲へらく『蟬冕の映ずる所なれば、更に風采を生ぜん。陛下當に與に以て眞に卽くべし』と。南史は則ち此の語を以て柳世隆の言と爲す。齊書崔慧景傳に「慧景 起兵し、闕に向かひて廣陵を過る。崔恭祖は門を開きて之を納る。慧景は停まること二日、江を渡り京口に至る。時に江夏王寶元は京口に鎭し、內應を爲す。乃ち二鎭の兵を合し、寶元を奉じて京師に向かふ」と謂ひ、南史は則ち「慧景は恭祖と未だ素約有らず。慧景 廣陵に至るや、恭祖は城を閉ぢて出でず。慧景は夜に廣陵を襲ひ、之に據る。子の覺を遣して京口に赴かしむ。寶元は其の兵の少きを見、濟らざるの事を恐れ、覺を反擊して之を走らせ、恭祖と覺と八千人を以て江を濟るに及び、柳惔等は寶元に勸めて慧景と合す。乃ち覺を以て先鋒と爲し、恭祖 之に次ぎ、慧景 都督と爲る」と謂ふ。北史に「梁の武帝 建業を破り、蕭寶夤を執へて將に之を殺さんとす。寶夤は逃げて魏に奔り、顯仕を歷、屢〻梁と戰ふ。後 謀反を以て誅せらる」と。是れ寶夤は魏に仕ふること三十餘年にして死するなり。南齊書寶夤傳は則ち「齊の和帝の中興二年、謀反を以て誅せらる」と謂へば、是れ寶夤は梁武の未だ帝と爲らざる時に當り、已に刑せらる。蓋し蕭子顯 南齊書を撰次するは梁の時に在れば、忌諱する所有るなり。梁書元帝紀に「承聖二年、魏 郭元建を遣はして舟師を合肥に治めしむ」と。南史は則ち「齊 郭元建を遣はす」と書す。按ずるに是の時 東魏は已に微に、政は高氏に出づ。梁書は名分に從ひて言ふが故に魏と書し、南史は實を按じて書するが故に齊と云ふなり。梁書鄧元起傳に「元起 兵を出して晉壽を救はず、以て陷沒を致す。蕭淵藻來り代りて其の逗遛を表す。乃ち收めて獄に付し、元起は自ら縊死す」と謂ひ、南史は「淵藻至り、元起に良馬を求む。元起は與へず、淵藻は之を殺す。後に梁武は其の枉を知り、淵藻を責めて『元起は汝の爲に讎を報ず、汝は讎の爲に讎を報ず』と曰ふ」と謂ふ。此に據れば則ち當に南史を以て確と爲すべし。其の尤も互に異なる者は、梁書には臨川王宏は北討諸軍を都督し、大潰して歸り、師を喪ひて國を辱くすると、及び公主に通姦する等の事は、一字も書せず、反つて大いに褒美を加ふ。南史は則ち一一直書して略ぼ諱飾無し。蓋し梁書は多く國史の記載を用ひ、原文を粉飾す。而ち南史は則ち實事を參考す

るなり。陳書後主沈皇后傳に「隋亡ぶるの後、后 廣陵より江を過りて鄉里に還り、終る所を知らず」と謂ひ、南史は「江を過り、毗陵の天靜寺に至り、尼と爲り、觀音と名づく。貞觀の初に卒す」と謂ふ。陳書吳明徹傳に「明徹戰敗して周師の執ふる所と爲り、憂憤して疾に遘ひて卒す」と謂ひ、南史に「周は明徹を封じて懷德郡公と爲し、大將軍に位せしむ」と謂ふ。陳書は蓋し節を完くするを以て之に予るなり。陳書徐陵傳に「陵 卒し謚して章と曰ふ」と謂ひ、南史は「後主 太子爲るの時、己の作を以て托して他人の者と爲し、以て陵に示す。陵『詞句を成さず』と曰ひ、後主 之を銜む。卒するに及び、後主は已に位を正し、乃ち謚して章僞侯と曰ふ」と謂ふ。姚察傳は南史は「察の父 僧坦は醫に精しく、梁の時大醫正と爲る。兩宮賜ふ所は、皆 察の兄弟の游學の資と爲す」と謂ふ。陳書は僧坦 醫術を以て幸を得たるを載せず、但だ「名を梁代に知られ、二宮の禮遇は優厚、賜を得る毎に察の游學の資と爲す」と云ふのみ。蓋し自ら其の醫なるを諱むなり。

【語注】

○宋の明帝……『南齊書』卷一高帝本紀上。○高帝 鴆を……『南史』卷四齊本紀上。○武帝は其の……『南齊書』卷三十四庾杲之傳。○南史は則ち……『南史』卷四十九庾杲之傳。○慧景 起兵……『南齊書』卷五十一崔慧景傳。○慧景は恭祖……『南史』卷四十五崔慧景傳。○梁の武帝……『北史』卷二十九蕭寶夤傳。○齊の和帝の……『南齊書』卷五十明七王蕭寶夤傳。○承聖二年……『梁書』卷五元帝本紀。○齊 郭元建……『南史』卷八梁本紀下。○元起 兵を……『梁書』卷十鄧元起傳。○淵藻至り……『南史』卷五十五鄧元起傳。○臨川王宏……『梁書』卷二十二太祖五王臨川靖惠王宏傳。○南史は則ち……『南史』卷五十一梁宗室上、臨川靖惠王宏傳。○隋亡ぶるの……『陳書』卷七後主沈皇后傳。○江を過り……『南史』卷十二后妃下、後主沈皇后。○明徹 戰敗……『陳書』卷九吳明徹傳。○周は明徹を……『南史』卷六十六吳明徹傳。○陵 卒し……『陳書』卷二十六徐陵傳。○後主 太子……『南史』卷六十二徐陵傳。○察の父 僧……『南史』卷六十九姚察傳。○名を梁代……『陳書』卷二十七姚察傳。

【現代語譯】

『南史』は、蕭齊の記事については、多く『(南)齊書』の

原文を用い、たとえ増やしたり削ったりはしても、大きく食い違うことはない。ただ高帝紀の吳喜が酒を賜ったという一事は、『(南)齊書』では「宋の明帝は蕭道成が人臣の相ではないかと疑い、喜に銀壺に入った酒を封じて彼に下賜させた。蕭道成は出迎え、(銀壺の酒を)酌んで飲み、喜は還って報告した。帝は心中で喜んだ」といい、『南史』では「蕭道成は鴆をおそれて飲まず、喜は誠意を示し、先に酒を飲んでみせた。帝はそこで酌んで飲み、喜は還って奏上した。明帝は喜んだ」といっている。『(南)齊書』庾杲之傳に「武帝は彼の風韻の美を嘆じ、王儉は『(庾杲之に)本當に侍中の冠を付けさせてやったら、いっそう風采が上がるでしょう。陛下は追って侍中につけるべきです』といった」と。『南史』ではなんとこれを柳世隆の言葉としている。『(南)齊書』崔慧景傳に「慧景は起兵し、闕に向い、廣陵を通過した。崔恭祖は門を開いて彼を迎え入れた。慧景は二日間滯在すると、江を渡って京口に至った。その時江夏王寶元は京口に駐屯して、内から呼應した。そこで二鎮の兵を合し、寶元を奉じて京師に向った」といい、『南史』では「慧景は恭祖と未だ確かな契約を結んでいなかった。慧景が廣陵に到着すると、恭祖は城門を閉ざして出なかった。慧景は夜間に廣陵を襲い、ここを據點とした。子の覺を遣して京口に向かわせた。寶元は彼の兵が少ないのを見、(江を)濟らないのではないかと恐れ、覺を攻撃して追い拂った。恭祖と覺と八千人を率いて江を濟るに及んで、柳惍等は寶元に勸めて慧景と合流させた。そこで覺を先と爲し、恭祖がこれに次ぎ、慧景は都督と爲った」といっている。『北史』に「梁の武帝は建業を破り、蕭寶夤をとらえて彼を殺そうとした。寶夤は魏に亡命し、顯職を歷任し、たびたび梁と戰った。後に謀反の爲に誅殺された」とは、これは寶夤は魏に仕えて三十餘年で死んだことになる。『南齊書』寶夤傳では「齊の和帝の中興二年、謀反の爲に誅殺された」といっているから、寶夤は梁武帝がまだ帝とは爲っていない時に、すでに處刑されていたのである。思うに蕭子顯が『南齊書』を編纂したのは梁の時であるから、忌諱する所があったのである。『梁書』元帝紀に「承聖二年、魏は郭元建を派遣して舟師を合肥に治めさせた」と(ある)。『南史』では「齊は郭元建を派遣した」といっている。考えてみるとこの時、東魏はすでに衰微しており、政も高氏から出ていた。『梁書』は名分に從って言った爲に魏と書し、『南史』は事實を按じて書した爲に齊といっ

たのである。『梁書』鄧元起傳に「元起は兵を出して晉壽を救わず、その爲陷沒を招いた。蕭淵藻はやって來て彼の逗留を表上した。そこで身柄を押さえて獄に入れ、元起は自ら首をくくって死んだ」といい、『南史』は「淵藻が到着すると、元起に良馬を求めた。元起は與えず、淵藻は之を殺した。後に梁武はその無實を知り、淵藻を責めて『元起はそなたの爲に讎を報じ、そなたは讎の爲に讎を報じた』といった」という。これに據れば、『南史』を正確であるとすべきである。そのもっとも互に異なっているところは、『梁書』には、臨川王宏は北討の諸軍を指揮し、慘敗して歸り、軍隊を失って國をはずかしめたこと、及び公主に通姦した等の事は、一字も書かず、逆に大いに褒美を加えている。『南史』では一一直書して避けて隱すことはない。思うに『梁書』は多く國史の記載を用い、原文を粉飾し、そして『南史』は實事を參考しているのである。『陳書』後主沈皇后傳に「隋が滅びた後、后は廣陵から江を渡って鄉里に還り、その最期はわからない」といい、『南史』では「江を渡り、毗陵の天靜寺に至った。尼と爲り、觀音と名乘った。貞觀の初に死んだ」といっている。『陳書』吳明徹傳に「明徹は戰敗して周師にとらえられ、憂憤して病にかかって死んだ」といい、『南史』では「周は明徹を封じて懷德郡公となし、大將軍に位させた」といっている。『陳書』は思うに節度を全うした形で書いている。『陳書』徐陵傳に「陵が死ぬと章と謚された」といい、『南史』では「後主は太子であった時、自分の作った文を他人のものと裝って陵に見せた。陵は『詞句を成してはおりません』と答え、後主はそれを恨んでいた。（稜が）死ぬと、後主はすでに位を正し、謚して章僞侯といった」といっている。姚察傳は『南史』は「察の父 僧坦は醫術に精しく、梁の時大醫正と爲った。兩宮が賜ったものは、いずれも察の兄弟の游學の資金とした」という。『陳書』は僧坦が醫術により幸を得たことを載せず、ただ「名を梁代に知られ、二宮に禮遇されることがきわめて厚く、下賜を得る毎に察の游學の資金にした」というだけである。思うに自ら父が醫であったことを諱んだのである。

（桑瀬　明子）